

ホルスタイン種を乳母牛とした子牛の哺育成績について

松山 義弘

(第41回西日本畜産学会講演要旨) 1990. 11. 6. 佐賀市はがくれ荘

目的: 黒毛和種は肉用牛のなかで一般に泌乳量が少ない品種である。このため、周年放牧での子牛生産では泌乳量が極端に少ない個体も見られ、放牧条件下で子牛を哺育することが困難になることがある。母牛の事故によっても哺育が困難になるケースがある。また、受精卵移植による多胎分娩においても哺育は困難になる。このように繁殖牛を多頭数飼養しての経営では、種々の原因によって子牛を母牛から分離して哺育しなければならなくなる機会が発生する。しかしながら、肉用牛繁殖経営での子牛の哺育は従属的な分野になるため、仕事が煩雑になり、病気も発生しやすくなる。一方、ホルスタイン種は泌乳能力が高く、1頭で数頭の子牛を哺育する能力があると考えられる。本研究では肉牛繁殖経営で自分の母牛からの吸乳哺育が困難になった子牛6頭および酪農部門からのホルスタイン種子牛8頭を、ホルスタイン種の乳母牛に付けた場合の哺育の可能性や問題点について検討した。

方法: 乳母牛として、平成2年1月22日に分娩したホルスタイン種(2産歴)を用いた。子牛の母牛は黒毛和種3頭、ホルスタイン種と黒毛和種との交雑種(F_1)2頭およびホルスタイン種9頭で、合計14頭である。また、子牛の品種としての内訳は黒毛和種6頭、 F_1 7頭およびホルスタイン種1頭である。調査した項目は哺乳開始日齢、体重、哺乳補助期間、哺乳期間、離乳時体重、下痢期間および哺乳期間中の1日当り増体重(DG)である。なお、子牛は同時に4頭哺育した。

結果: 哺乳開始時の日齢および哺乳開始時の体重は当然なことながら母牛の品種によって有意な差が認められた。また、哺乳開始時の体重が小さい個体ほど下痢の回数が増える傾向があり、その結果下痢の総期間が長くなる傾向が認められた。しかし、哺乳補助期間、哺乳期間、離乳時体重およびDGにおいては母牛の品種間、子牛の品種間、子牛の性間および子牛の下痢回数で有意な差は認められなかった。下痢期間と離乳時体重との間に -0.534^* の相関が認められた。また、DGと離乳時体重との間には 0.539^* の相関が認められた。以上のことから、ホルスタイン種を乳母牛として、子牛を哺育する場合、下痢に対処する技術を備えていれば実施することが可能であると考えられる。